

否定弁証法の射程——アドルノにおける自己反省の論理——

学位論文内容の要旨

本論文は、20世紀のドイツにおいて哲学・社会学・美学などの広範な領域にわたり多彩な思索を展開した Th. W. アドルノの思想について、のちに「否定弁証法」(die negative Dialektik) として結実してゆくその哲学的思考の射程を、とりわけ「自己反省」(Selbst-reflexion) という概念に視点をしぼり見きわめようとするものである。中心的な課題となるのは、「概念によって概念を超え出ようとする努力」というきわめて逆説的な成り立ちのうちにアドルノが設定する否定弁証法という哲学のあり方について、一方ではヘーゲルをはじめとするドイツの哲学的諸理論との関連において、また他方では J. ハーバーマスなど現代の諸理論家たちの批判にこたえるかたちで、「自己反省」をめぐる論理のうちにその実質をさぐることである。おもなテキストとしては、M. ホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』(Dialektik der Aufklärung)、1950年代以降のいくつかの哲学的著作、そして後期の理論的主著『否定弁証法』(Negative Dialektik) がもちいられる。(全体は五つの章から構成される。)

まず第一章では、アドルノの哲学のひとつの基盤をなす現実に対するその批判的洞察を『啓蒙の弁証法』のうちに見さだめながら、自己反省をめぐる端緒的な構想を確認することが課題となる。そのためにまずは、のちに否定弁証法として主張されるアドルノの哲学的思考との関連も視野にいれつつ、『啓蒙の弁証法』の基本的なモチーフが確認されたうえで、同書において展開される歴史哲学的な構図が、とりわけ「自然」(Natur) と「自然支配」(Naturbeherrschung) という複雑に絡みあった概念にそくして再構成される。そのうえで、いわば新たな野蛮へと転化した自然支配のあり方に対抗する方途として主張される「啓蒙の自己省察」(die Selbstbesinnung der Aufklärung) という構想について、否定弁証法において求められることになる思惟の自己反省との微妙な差異と連続にも着目しながらその実質をとりおさえつつ、しかしなお啓蒙の自己省察というこの方途のうちに、いわば自然支配の他者としての自然をめぐるいくつかの困難が孕まれうることを確認する。

第二章では、『否定弁証法』へといたるアドルノの思索のなかでさらに展開された「思惟の批判的自己反省」(die kritische Selbstreflexion des Denkens)という構想について、まず『啓蒙の弁証法』における自己省察概念との連続性に着目しながらその実質を確認し、そこに孕まれうる困難をあらためて整理することが主題となる。まずはじめに「否定弁証法」といわれる哲学のあり方がごく大まかにおさえられながら、その媒体とみなされる思惟の自己反省があくまで「批判的」なものとして位置づけられることが確認される。次に、カントにおける「超越論的主観」、またヘーゲルにおける「自己意識」の捉え方に向けられたアドルノの批判的な視点をふまえながら、自己反省を遂行する主体が、身体を伴った個体のうちで完結しえない運動として思惟を遂行してゆく、いわば非同一的な主観のあり方のうちに想定されていることが確認される。そのうえで、批判的自己反省という構想に対してなされうる批判として、アドルノの哲学を、逆説的なあり方から脱することなく、結局は非合理的なあり方に帰結するものとして断罪するハーバーマスの所論を概観することを通じ、啓蒙の自己省察と同様、思惟の批判的自己反省という構想にも伴われるかに見える困難、つまり自己反省の〈起点〉と〈帰着点〉をめぐる困難について整理が行なわれる。

第三章では、それらの困難のうち、まず自己反省の〈起点〉にかかわる問題を取りあげ、それに対する回答を「非同一的なもの」(das Nichtidentische)という概念の再検討を通して探ってゆくことが課題となる。そのためにまず、非同一的なものという概念のうちに見込まれているひとつの実質を、実在的な「ことがらそのもの」(die Sache selbst)という論点にそくして見さだめながら、さらに認識の成り立ちのうちでこの非同一的なものの意味するより具体的な内実が、「経験」(Erfahrung)の質料としての「多様なもの」、そしてとりわけ身体的な要素として把握される「感覚」(Empfindung)をめぐる考察される。そのうえで、この非同一的なものが、しかしなんらかの特殊な直接知によってのみ感受されうるような、思惟にとって端的に他なるものとして想定されているのではなく、むしろあくまで思惟の「同一化」(Identifikation)との関わりの中でこそ意識され、そのかぎり自己反省の起点となるものとみなされていることが、とくに「矛盾」(Widerspruch)という概念にそくして確認される。

つづいて第四章では、思惟の批判的自己反省に伴われるかに見えるもうひとつの困難、つまりその〈帰着点〉をめぐる問題を取りあげ、自己反省の過程を通じて非同一的なものを開示しようとするアドルノの思考を確認することが主題となる。まずはじめに、思惟の批判的自己反省という方途の成り立ちが、同一化としての思惟そのもののうちに見込まれ

る批判的な「否定作用」というはたらきに着目しつつ、あらためて概観されたうえで、さらにこの批判的なはたらきのうちに想定されるより積極的な思惟のあり方をめぐり、「規定された否定」(die bestimmte Negation) というヘーゲルから継承された概念についてのアドルノ独自の把握が、「弁証法」をめぐるヘーゲルの思考との正反両面にわたる関係をふまえながら考察される。そのうえで、この規定された否定としての批判的自己反省のうちにこそ、矛盾として意識された非同一的なものを、あらためて具体的な表現にもたらず概念的媒体、すなわち「布置」(Konstellation) という諸概念の「連関」ないし「相関関係」の形成が見込まれていることが確認される。

最後に結語では、以上の考察を総括しながら、思惟の批判的自己反省をめぐるアドルノの哲学的思考の射程、いわば否定弁証法の射程を見きわめることが課題となる。そこではあらためてヘーゲルとの関係において、またハーバーマスの批判に応接するかたちで、アドルノの主張する自己反省の内実がとりおさえられたうえで、いわば「思考の自由」(die Freiheit des Gedankens) を「客観への自由」(die Freiheit zum Objekt) として捉えかえしながら、この「客観への自由」の実質をあくまで「思惟の批判的自己反省」のうちに見いだそうとするアドルノの視点が確認されることになる。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 高 幣 秀 知 (哲学専攻)
副 査 教 授 植 木 迪 子 (独文学専攻)
副 査 教 授 山 田 貞 三 (独文学専攻)
副 査 助 教 授 浅 見 克 彦 (哲学専攻)

学 位 論 文 題 名

否定弁証法の射程——アドルノにおける自己反省の論理——

本審査委員会は、平成 10 年 12 月 11 日に発足以後、通算 4 回の委員会を開催し、論文の内容と問題点に関する討議をおこなうとともに、口頭試問を実施して、以下のような評価と結論に達した。

「人類はなぜ、真に人間的な状態へと踏みいつてゆくかわりに、一種の新たな野蛮のうちに落ち込んでゆくのか」という問い —— M. ホルクハイマー、Th: W. アドルノをはじめとする「フランクフルト学派」による批判理論のひとつの原点をなす『啓蒙の弁証法』(1944年)において発せられたこうした問いに対する、より深化された批判的応答の内実を、後期アドルノの哲学的主著『否定弁証法』(1966年)における思惟の批判的自己反省の論理のうちに探ること、これが本論文の主題である。『否定弁証法』の課題は「主観の力によって構成的主観性の欺瞞を打ち破ること」にあると、アドルノ自身によって記されていた。

アドルノ独自の《否定弁証法の射程》を思惟の批判的自己反省において把握することによって、一方においてはヘーゲルとの対位と継承との関係をあきらかにするとともに、他方においてはハーバーマスのアドルノ批判に応答するという、本論文において設定された所期の課題は、その首尾一貫した論述において十全に果たされている。アドルノはヘーゲルの論理へと回収されるとする粗略な解釈、またアドルノはハーバーマスの批判によって克服されたとする安直な解釈はいずれも、その論拠を喪うのである。ここに本論文の揺るがぬ成果がある。

本論文の結語部分では次のように述べられている。思惟のはたらきが、矛盾として意識される非同一的なものを起点としながら、同一化というそれ自身のあり方を吟味し、布置という諸概念の連関に向けて、みずからを組みかえてゆくこと、このことによってこそ、そのものとしては思惟がつくりだすわけではない非同一的なことがらは、なお開示される、と(本論文 99 頁参照)。そして、同一化作用へといわば命じられてある思考が、概念的な知そのものの動揺というかたちをつうじて、こうした同一的なならざるものへの行程を開始し遂行する、と把握されているとすれば、そこには、「批判理論」においていわれる《批判》というものの所在が明瞭に浮彫にされている、ということができる。

このような積極的評価のうえで敢えてなお、議論の余地を残すとされる論点をあげるとすれば、アドルノのこうした哲学的試行は、倫理学、美学、社会学そしてさらには文学、音楽学などの各領域へと展開されているのであるが、本論文ではむしろ、そうした具体的展開への基盤をなすアドルノにおける《自己反省の論理》そのものを究明することに主要な問題関心が向けられている。そのかぎりにおいて本論文にはなお、それらの具体的諸問題領域へと探究をすすめることによって、その論理自体の内実をさらに充実させてゆくという余地は残されているといえよう。またこのことと関連して、『啓蒙の弁証法』から『否定弁証法』への連続性に着目するあまり、それらのあいだの「微妙な差異」ないしは断絶についての論究が、かならずしも充分には分節化されてはいないといった問題次元が指摘されるであろう。自己保存の欲動という生の罪科そのものがもはや、生とは和解され難いという事態こそが、『否定弁証法』の段階におけるアドルノにとっての哲学への動機づけをなしていた。自己保存と衝動という契機を根こそぎにされた思考は変容し、潜勢力を秘めたまま凝縮されゆかざるを得ないとすれば、ここにはなお考究されるべき問題圏が存在すると考えられる。

さらに展開されてよいこうした論点を残すとはいえ、しかしそれらはいずれも、本論文において達成された成果を損じるものでは決してあり得ない。アドルノのテキストの徹底的な読解に基づき、一方ではドイツ古典哲学に対するその関係を慎重に考察するとともに、他方では現在の欧米のアドルノ解釈に対する周到な批判的検討を踏まえた本論文によってようやく、これまでの日本における解説的論評や個別的研究の水準を越えた、本格的なアドルノ哲学研究へのひとつの確実な立脚点が構築されようとしている、と高く評価されるところである。

本審査委員会は、以上の評価に基づき、全員一致して、本論文の著者麻生博之氏に博士（文学）の学位を授与することがふさわしいとの結論に達した。